

## 巻頭言

*St. Paul's Librarian* 33号をお届けいたします。

司書課程にハモンドエレン特任教授が着任して1年が過ぎようとする今、改めて今年度は大きな変化のあった年だったと思います。巻頭には国外から講師を迎えた講演会の記録を掲載しました。今年は、それぞれについて、学生たちから英語でもリアクションを寄せてもらいました。昨年度までは、外国語での講演に対しても、日本語でリアクションを書く学生ばかりだったのですが、今年は講演者の先生の言語（英語・スペイン語）で挑戦する学生が増えました。

選択科目「図書館サービス特論」は、ハモンド特任教授の英語での授業になりました。国外の話聞いて視野を広げるだけでなく、より多くの人たちに自分の考えを伝え、意見交換をして考えを深める、そして自らの行動につなげるという流れが、司書課程のさまざまな授業の中で経験できるようになってきています。国外への図書館実習生の派遣は今年度で2回目となり、香港と台湾に各2名の実習生を送り出しました。国内での実習も、図書館実習の制度改革がひと段落して、人数は再び増えて落ち着く兆しが見えてきました。事後指導として、実習に行った学生たちの学び合いの機会を用意しており、ハモンド特任教授と私ももちろん参加して、ここでそれぞれに異なる図書館で行った実習の経験から、図書館とその仕事についての理解を深めてもらっています。

2018年度はまた、選択科目「図書館基礎特論」で、司書が知っておくべきアーカイブズの基礎の基礎を学んでもらおうと考え、松崎裕子先生（株式会社アーカイブズ工房代表）をお迎えしました。欧米では、図書館の中にアーカイブズが置かれている例が散見され、共通点と相違点についての理解もある程度、一般的だと思われそうですが、日本では司書課程の中でアーカイブズに言及しても、記録管理とその専門職の重要性が具体的に想像できないのか、腑に落ちてもらえないような印象がありました。松崎先生をお迎えできて、アーカイブズだけでなく、図書館活動の広がり理解してもらえ、よい授業を提供できることとなって、嬉しく思っています。こうした、講演会や「図書館基礎特論」からの学生たちの学びの振り返りを、今号にも多数掲載しております。ぜひご一読いただければと存じます。

「図書館実習事前指導 I」には、今年は、本学卒業生で大学図書館で働く北田さゆりさんにいらしていただきました。実習から就職活動を経て社会人へというご自身の歩みを後輩たちと共有してくださって、学生たちは年の近い先輩のお話に熱心に耳を傾けていました。若い人たち同士がつながって、新しい図書館を、社会を切り拓いていくときに、私たち教員は何ができるのか、何をすべきなのかと考えさせられもしました。

最後になってしまいましたが、本学校友の鈴木均氏（浦安市立図書館司書）が5月に逝去されました。本学司書課程の後輩のために、しばしばお力を貸してくださって、感謝に耐えられません。病が進行しても、図書館現場に立ち続け、また執筆活動も続けられて、館界に多くのものを残してくださいました。一緒に教科書の出版に向けて作業をしておられた、本学で「図書及び図書館史」を長年ご担当いただいている小黒浩司先生（作新学院大学教授）から、追悼文をいただき、本誌に掲載しております。

残された私どもは、試行錯誤を繰り返しつつ、よりよい教育の実現に努力するよりほかないと思っています。改めまして、2018年度も、学内外、国内外のみなさまから、本学司書課程にお力添えをいただきまして、心より御礼申しあげます。

中村 百合子  
（立教大学司書課程主任）

